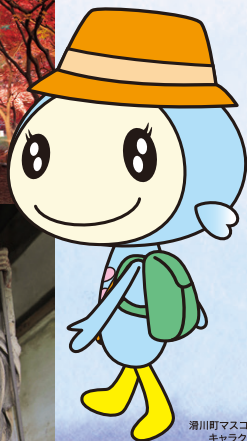


町制施行30周年記念事業

滑川町

ふるさと散歩道



滑川町マスコット
キャラクター
「ターナちゃん」

「滑川ふるさと散歩道」の刊行にあたって

滑川町が町制施行した昭和五九年当時、『広報なめがわ』に「ふるさと散歩道」として題して、町内の名所・旧跡を訪ねて、古き時代に思いを馳せたコラムを掲載していました。当時は、広報担当から文化財保護委員や教育委員会文化財担当に執筆をお願いする傍ら、町の自然の素晴らしさなども紹介しながら広報の一コーナーとしてまとめていました。しかし、体系化もできておらず、既に忘れ去られたものになっていました。

時代はさらに進み、ライフスタイルも大きく変わってききましたが、古く旧石器時代から脈々と続くわがふるさととは、四季折々の表情を今に留める自然豊かな町です。ここに暮らした人々の生活の痕跡は文献や資料からはわずかで、推測することしかできません。しかし、点在する沼や石碑などは、今でも悠久の歴史を私たちに語りかけてくれています。

折しも、町制施行三〇周年を迎えるにあたり、記念誌のひとつとして、また、「健康づくり行動宣言」をした町の健康づくりのキーワードのひとつとして、町内を楽しみながら歩くことを考えたとき、「ふるさと散歩道」をまとめて、刊行することとなりました。

本書が郷土の歴史遺産を再認識して頂くために役立てば幸いです。

平成二六年十一月三日

滑川町長

吉田 昇

目次

「滑川ふるさと散歩道」の刊行にあたって

例言

滑川の源流を訪ねて……………6

なぜ多い町内の沼……………7

ため池を利用した米作りのルーツを探る……………9

市野川の用水争い……………10

滑川町の縄文・弥生時代……………13

板石塔婆……………14

Aコース（北部）

山田城跡……………17

南族二三騎・番場七観音碑文……………19

木曾義仲の末裔……………21

Bコース（西部）

浅間神社と鰐口……………23

天神山横穴墓群を訪ねて……………24

秋日遊高根山記……………26

福田鉱泉の由来記……………28

真福寺の鰐口……………29

成安寺縁起……………32

福田の馬頭観音さま……………33

竹二坊と俳諧……………35

和泉の文化財……………38

八宮神社を訪ねて……………40

町で一番高いところは……………41



伊古の地名の由来……………43

伊古乃速御玉比売神社……………44

慶徳寺……………45

伝説の沼 両頭庵沼……………47

Cコース（南部）

羽尾神社 恒儀様……………50

愚禅和尚の筆跡をたずねて……………51

東日本最古の古代寺院跡……………53

五厘沼窯跡群……………55

劍豪 大塚麥恵八先生……………56

宮嶋勘左衛門之碑 枇木の考案……………57

月輪神社と獅子舞……………58

糠ヶ谷戸の道陸神……………60

鳴水毛受雄也先生墓碑……………60

羽尾七騎……………62

例言

一 本書は町制施行三〇周年記念事業のひとつとして制作したものです。

二 本書は『広報なめがわ』の一九四号（平成五九年十月号）から二二三二号（昭和六二年十二月号）に掲載されたコラム「ふるさと散歩道」より抜粋したものであり、本書においては順不同です。

三 本書は、町内に残る文化財や歴史的景観についての概説のほか、地域別に三つの散歩コースを設定しています。

四 本書の内容は基本的に掲載当時のままであり、一部については加筆、修正を行っています。

五 本書の作成にあたり、滑川町文化財保護委員の高柳茂氏にご協力いただきました。

六 本書と観光マップ「ターナちゃんと行くおでかけマップ」を合わせて利用することをお勧めしています。

● 円正寺古墳群

高根山

泉福寺 木造阿弥陀如来坐像

福田鈷泉跡

七觀音碑文

真福寺

馬頭觀音堂

海上風雲

伊古乃速御玉比売神社

烟霞仙

竹二坊

山田城跡

浅間神社

国営武蔵丘陵森林公園

熊野神社
成安寺

馬頭觀音堂

山梨・山つて
伊古の里

農家レストラン

伊古乃速御玉比売神社

エコミュージアムセンター

両頭庵沼

7

比企郡
滑川町

コース
なめかわ森林モリ

羽尾神社

0

JA滑川農産物直売所

羽尾城跡

毛受先生墓碑

9

福正寺

5

寺谷廃寺

4

月輪神社

7

羽尾道陸神

8

宮嶋勘左衛門之碑

車道

五厘沼鯨跡群

3

2

1

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

216

217

218

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

232

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

255

256

257

258

259

260

261

262

263

264

265

266

267

268

269

270

271

272

273

274

なめがわ 滑川の源流を訪ねて

村名の由来に

滑川の流れはまたゆるやかに人の心はなめらかにと、滑川音頭の中で歌われています。滑川は、村を南北に二分し、南を宮前地区、北を福田地区と呼んでいます。昭和二九年の合併時には、村名の由来にもなっています。そんな滑川の源流は、どこなのでしょう。滑川町役場の横から上流に沿ってさかのぼってみました。

中尾、伊古の右岸側の耕地及び和泉の左岸側は、土地改良が実施されていて、河川が整備されています。いくつかの堰があり、農業用水の確保などに重要な役割を担っています。



町を東西に貫く“滑川”



す。左岸側の下福田の大木、両表の近くは昔ながらの水田と工業用地が続いています。和泉の泉福寺が見える近くになると、嵐山町に入ります。古里付近へいくと、川幅五十サシロメートルから一メートルの俗にいう堀になってしまい、谷津へ入り込んでいます。古里付近の地形などから見ても、源流は嵐山町古里付近ではないかと思えます。滑川町役場の横から今度は下流に行ってみました。下流も河川は整備されていて、東松山市を通過して、吉見町百穴付近で市野川と合流しています。

滑川にまつわるこんな昔話があります。

松山城の御姫様が、いいなづけの鉢形城の殿様が来るというので、滑川の水鏡に自分の姿を映して髪をすいていた時、大切な櫛を川に落としてしまった。川の中をいくら探してもみつからなかったので、「櫛がみつからな

いうちは、このなめがわの水は澄んではならない。」といって怒った。それ以来、滑川は澄まなくなつたというのです。滑川には、こんなお話が伝わっていて、不思議なロマンを与えてくれます。

また、嵐山町古里付近から吉見町百穴付近まで約一五キロメートルです。ハイキングがてら歩いてみてはいかがですか。新しい「滑川」なめがわを発見できるかもしれません。

（広報一九四号 昭和五九年十月）

なぜ多い町内の沼

埼玉県の沼の濃密な地域は、県中央部の比企郡にあり、滑川町はその中核になっています。



町に点在するため池

す。これは、沼の数からみてもわかるように、県内の沼の数は七三四個、町内の数は一九二個で全体の二六・二割を占めています。これは、本町の代表的な農業ともいえる稲作が、昔からさかんに行われ、その水源を沼に依存してきたためだと思われます。そんな沼の呼称について、比企地方では、一般に大沼、中

沼などと呼んでいます。比企地方以外では、大池、中池などと呼ぶのが一般的なようです。

江戸時代の国学者清水浜臣は、その紀行文「都伎山日記」の

中で、福田村（現滑川町）の光谷自得、俳名竹二坊を訪ねる道中で、福田周辺に沼が多数散在していることをあげています。また、沼にまつわるこんな言い伝えがあります。

下山田の寺沼のそばに城山があり、武蔵七党の一派の某が築いた中世の城があったそうです。世はまさに戦国時代、この城も戦火につつまれました。形勢、我にあらず、味方の家来もつぎつぎに討死してしまいました。もはやこれまでと城主の姫は、寺沼に入水して命を絶ったというのです。

こんな言い伝えを残す町内の沼は、江戸時代前期には大多数があったということです。民俗資料集第3集「滑川村の沼と民俗」から

（広報一九六号 昭和五九年十二月）



ため池を利用した米作りの ルーツを探る

いつ頃からこの米作りが開始されたのでしょうか。これまでの発掘調査の知見からは、遅くとも弥生時代の半ばには、かなり本格的な米作りが行われていたと推定されます。大谷遺跡（現宮前小学校）や船川遺跡（現森林病院）の発掘では、竪穴式住居^{あと}址から砥石^{といし}やこしきが出土しています。砥石は、鉄製農具の普及していたことを推定させますし、こしきは炊飯用の土器ですので、この地域ですでに米作りが行われていたことは確実です。遺跡の規模からして、彼らは滑川の氾濫を制御して川沿いの広い低地を水田として開発する技

術はまだ持っていなかったでしょうから、おそらく、遺跡周辺の谷地を利用して米作りをしたのでしょう。

六世紀から七世紀には、滑川の流域に面した丘陵上にたくさんのお古墳が築造されています。この多数のお古墳の分布によって、この時期に滑川流域の開発が積極的に進められたことがわかります。つまり、これまでの谷津^{やつだ}田だけではなく滑川流域の広い低地を水田として利用し始めたと考えられます。

現在、ため池は農業用として、私たちの生活に欠くことのできない存在ですが、古代においてはどうかだったのでしょうか。ため池が一体いつ頃から造られたのか、正確な時期はまだ明らかではありません。しかし、羽尾の五厘沼^{かまあと}のほりにある窯跡^{かまあと}の発掘調査によって、ひとつの重要な手掛かりが得られています。



五厘沼窯跡

す。窯跡は須恵器（灰色の焼き物）を焼いた施設で、七世紀初頭のものとは推定されています。窯体の下には、通常不良品や灰などの捨て場が設けられるのですが、どういうわけか、五厘沼窯跡の場合には、窯体の脇に設けられていました。このことから、この窯の操業中すでに、ここにため池（五厘沼）があったことが予想されます。窯から出る廃棄物を窯体の下にかき出せずに脇に捨てたという訳です。

現在でもため池は、水量を保つことに注意を払っており、かつては水利権者が集まって泥さらいをしたほどでした。もし、この窯跡が操業

されている時にすでに、ため池が存在し、米作りに利用されていたとすれば、当時の人々にとっても聖なるものであったはずで、窯からの廃棄物を沼に捨てることは当然避けられたでしょう。

五厘沼窯跡での推定が事実だとすれば、ため池を利用した米作りのルーツは古墳時代まで遡れることになります。

（広報二二九号 昭和六十二年九月）

市野川の用水争い

梅雨のころともなると、田植えに忙しい農繁期の時期である。しとしとと、降る雨に水田に広がる緑はしばし、やすらぎを与えてく



れる。時には、この雨はうっとうしさを感じさせるが、この雨のもたらす恩恵は計り知れないものがある。

町の南を東西に流れる市野川も稲作に欠かせない水源として人々の生活に密接にかかわってきた。この地方一帯が大干ばつに見舞われ、水をめぐる問題に直面した当時の様子を紹介しよう。

今から、一五九年ほど前の嘉永六年（一八五三年）六月、アメリカ使節ペリー一行が浦賀に入港し、江戸幕府に開国を迫り、幕府がその対応に頭を痛めていたころの話である。

江戸時代の税制では、田租（年貢）として米を納めていた。米作中心のこの一帯では田植えが済んだばかりで稲の根の張る最盛期とあって、この干ばつは文字どおり生活に直接ひびく大問題であった。天を仰ぎ炎熱の太陽

を恨めしく思い、生活に対する不安と苦悩をつのらせる日々の連続であつたろうと推察される。そんな折、市野川の水を水田用水として利用する羽尾村では、少しでも多く水を確保するため、上流に向けて「川払い」を開始した。

「川払い」とは、土砂をさらったり、流入のじゃまになる木の葉くずや古木、岩石を取り除き、水の流通をよくすることである。

これを知った上流筋の志賀村、杉山村（二村 現嵐山町）の代表二名が水房、月輪（二村 現滑川町）、太郎丸、広野、川島（三村 現嵐山町）、志賀、杉山、七力村の代表として、羽尾の村役人宅に突然やって来た。

その要件とは、川面に面した上流の各村々でも先年より市野川の水を水田用水として利用しているところもある。市野川の「川払い」

は非常に迷惑であると、上流筋七力村の意向として「川払い」の中止を要望して来たのである。事の重大さを察知した羽尾村役人は協議を重ね、その対応を急いだ。そして、村代表二名に事実と真相の究明に各村々を回らせ、ことの打開に当たらせた。

近接する村々、五力村では、折衝はこのほか順調に進んだが杉山村に対する折衝は難航した。三度に渡る談合が持たれたが、結論がでない。羽尾村にとっては、用水確保は、村運営の動脈とも言え、用水保持にあらゆる犠牲を払っても確保しなければならなかった。

強硬な折衝を続ける羽尾村と杉山村との間に対立が生じはじめ、風雲急を告げつつ、近隣一帯を大きく巻き込む様相を呈し始めた。この状態を重く見た村々でも共同連帯や互助

的な判断からこの一件の仲介に乗り出し、和解工作が続けられた。そして、短期間のうちに、双方に利害関係のない名主たちの手により円満に和解が成立した。こうした和解を内済ないさいと呼び、その証文を済口すくちと呼んだ。

大事にいたらず、この一件は落着いたが、一大事件に発展していたら、後世に大きな禍根を残すものであったろう。この用水争いからも、当時の人々の水に対する執ようなまでの執着がうかがわれる。生活様式がかわり、時代は急激に進歩したとはいえ、かけがえない水に変わりはない。私たちもこの教訓を忘れずに、水を大切にしていきたいものである。

(広報二二四号 昭和六一年六月)

(滑川村史から)



滑川町の縄文・弥生時代

「古代人がどのような生活をしていたのか、知る手がかりは少なく、その軌跡をたどることは難しい。推測の域を越えていくには新しい発見が必要なのだが、判然としないままに、むやみに発掘することはできない。」と、町の遺跡発掘を手がけた担当者は語っていた。

昭和六二年当時の発掘の成果だが、当時のままに、記載していきこう。発掘調査した打越



滑川町最古の土器

遺跡は縄文時代の重要な遺跡であることが確認されていたが、コンクリート工場があったため調査ができなかったが、東京

電力保険組合の保養所が建設させることにより、そのチャンスが巡って来た。

そして、期待通りの大きな成果が得られた。最初に手をつけたグラウンド用地の表土二、三センチのところから約一万年前の縄文時代草創期の爪型文土器の破片が大量に出土したのである。その中には一万年前としては珍しい平底の土器とみられる破片があり、その底に竹や木を組んで作った「網代」^{あじろ}の模様が残っていた。

また、この土器が出土したところから約五メートルほど離れた所に縦一二センチ、横八センチの弥生時代後期の竪穴住居など三軒の住居跡が発見されたのである。これまでに発掘された県内の同時代の住居跡は、六センチぐらいのものでこれと比べると、かなり大きく県内では最大級のものであるという。おそらく一般の住居では

なく、集会所などのように使われたのか、相当身分の高い人のものなのか興味深い遺跡である。

これらの発見から、わが国に土器づくりが始まった最初の時期に早くも縄文時代人が羽尾地内に定住していたことが分かった。丘陵地帯に進出し、山稜の小動物や鳥を追って生活したに違いない。もちろん、谷地や沼沢地に棲息する魚介類も主要なたん白源であったろう。大自然とたたかいながらの生活はやがて、稲作の伝播により、弥生時代には、ここに集落が形成されていたこと分かった。生活・文化の発達過程を知るうえで、大変価値のある遺跡である。貴重な発見であったが、まだまだ埋もれている遺跡も多いだろう。ひとつの発見がまた町の古代史の一ページを塗り替えていくことだろう。

(広報二三〇号 昭和六十二年十月)

板石塔婆

町内に散在する「板石塔婆」から何を考えるだろうか。おそらく、石塔、梵字、青石、平石、墓石などを連想する人が多いと思う。

板石塔婆は「板碑」「青石塔婆」などと呼ばれ、一三世紀初めから一六世紀にかけて造られた石造遺物である。埼玉県埼玉県の荒川流域を中心に全国各地で盛んに造立されたもので、特に県内では長瀬町や小川町下里で産出される緑泥片岩(俗に鉄平石と呼ばれる)を利用して造られている。河川を利用して運ばれたといわれているが、かなり大型ものから、ごく小さなものまで、その大きさは様々である。形は三角形にして二条の線を刻み、その下を長



方形にした、いわゆる関東型と呼ばれるもので、種子(梵字)や名号(南無阿弥陀仏)、題目(南無妙法蓮華經)、図像などを碑面に刻み、建てた年号や人名、真言、偈^げなどを彫^うつたりしてある。

では何の目的で建てたものだろうか。当時
はうち続く戦乱の世の中であった。明日の我が身を思う時、心の平安を願うために誰もが極楽往生を祈って建てたものではなかったろうか。研究者の間では次の三つの理由が考えられる。第一は追善供養で建てたもの。第二は、死後極楽浄土に行けるように自分で建てた逆修供養^{さくしゅうくよう}のもの。第三は墓石として埋葬した墳墓の上に建てたものである。しかし、墓石として建立したものは少ない。

町内では、およそ三百年間に二四一基(破片を含む)が確認されている。誰が何のため

に建てたか判明するものは少ないが、大小の板石塔婆をながめていると、当時の人々がどのような胸中でこれを建立し、生活したか、偲^{おも}ふことができる。

さて、この板石塔婆であるが、現在、全国で最も古いとされているものが隣の熊谷市(旧江南町)大字須賀広の大沼公園内にある。嘉禄三年(一二二七年)銘の阿弥陀三尊である。これより二四年後の建長三年(一二五一年)に建てられたものが下福田・馬頭観音堂に所在する。豪快な薬研彫りの阿弥陀三尊で、下部が欠損しているものの立派な板石塔婆である。寺伝によると、高野聖が当地に数年間住し、帰る時に建てたと言われている。隣には、橋として使用されていた町内最大(三二六センチ)の阿弥陀三尊が建てられている。上福田・小川谷集会所には、文永八年(一二七



建長の板石塔婆

一年)の結衆板碑が一部欠損して建てられている。初期念仏結衆の形態をとどめている。上福田・湯谷薬師堂には、町内で最も美しい文永八年の大型板碑が所在する。藪に裏返しで倒れていたため、摩耗しなかったものだ。以上の板碑は、鎌倉時代初期の代表的な作例であるが、数少ない中世史解明の重要な資料となっている。

(広報二三二号 昭和六十二年十二月)



Aコース(北部)

- ① 山田城跡(森林公園内南口付近 山田地区)
- ② 南族二三騎・番場七観音碑文(上福田地内 福田小学校東側)

- ③ 木曾義仲の末裔(福田地内)
- ④ 浅間神社と鰐口(上福田地内 浅間神社)
- ⑤ 天神山横穴墓群を訪ねて(上福田地内 通称 天神山)
- ⑥ 秋日遊高根山記(上福田地内 高根山)
- ⑦ 福田鉱泉の由来記(上福田地内 福田鉱泉)
- ⑧ 真福寺の鰐口(上福田地内)
- ⑨ 成安寺縁起(下福田地内 成安寺)
- ⑩ 福田の馬頭観音さま(下福田地内 成安寺)
- ⑪ 竹二坊と俳諧(下福田地内)

Aコース



滑川ふるさと散歩道……① 山田城跡

夏草や兵どもが夢の跡

江戸時代初期の俳人 松尾芭蕉が門人
河合曾良と旅した同中記「奥の細道」の中に
この句がある。徳川家康の関東支配、徳川幕

藩体制の確立とともに、中世(鎌倉時代から安土桃山時代まで)に栄華を誇り、関東の覇権を競い、争った武士たちの城や館は次々に廃城となっていた。

栄枯盛衰は世の常であるが、芭蕉もその城跡に立つと、弓を引き、槍を持ち、馬を飛ばした武士の生活の息遣いが、戦いの闘いの声が聞こえるようであり、往時をしのび感慨深く思ったのであろうか。

町にも中世に築城されたと思われる城館跡がいくつかあるが、戦乱に明け暮れていたためか、中世を説明する資料はほとんどない。鎌倉幕府が編んだ歴史書「吾妻鏡」や戦国期の東国地方の歴史書「豆相記」や他の歴史書にもわずかに見られるが、歴史の挟間に埋もれてしまっている。最初に城館の遺構が一番よく保存されている山田城について紹介しよう。

この城は、森林公園南口からすぐ近い林の中にあり、桜の美しい花木園の西側の舌状台地の先端部に位置する。滑川の支流に挟まれて南には、水田地帯が広がる。城郭は、東西百畝、南北百四十畝、約千五百平方畝の広さがあり、外周の土塁の高さは、一畝前後で四つの郭に分けられている。

地元の伝承では、忍城(現行田市所在)主の成田氏の臣、賛田氏の居城であるとか、松山城の出城であるとか、伝えられている。全く資料



山田城南空堀

がなく、築城・廃城時期を探る手掛かりは何もないが、古い言い伝えにこんな悲しい話がある。世はまさに戦国時代、どの戦いかは定かでないが、この城も戦火につつまれ、刀折れ、矢つき、城を守る家来もつぎつぎに討ち死にしていた。もはやこれまで、生きのびる手だてもなく、この城の姫は、近くの沼に入水し、若い命を絶ったという。森林公園内ということもあり、観光客の憩いの場となっている城跡。そこに、たたずむと静けさの中に、木々がざわめく様は、過去の歴史が何かといかけてくるようであった。

(広報二二六号 昭和六十二年六月)

■滑川ふるさと散歩道……②

南族二三騎・番場七観音碑文

羽尾に住した羽尾七騎(Cコース⑩ 羽尾城)と同様に、南族二三騎と呼ばれる土豪衆が本町に散在していた。「南族二三騎」とは、荒川を隔てた川南地帯、いわゆる現比企郡、大里郡(旧大里町、旧江南町、熊谷市の一部などの荒川の南側)に住住した土豪衆によって編成された在地武士団である。荒川以南に住した武士団という意味で名付けられたものらしい。(村史通史編四百二頁参照)

この二三人の武士の名と知行高、所在を記した巻物が旗頭とされる山田の贅田家に伝わっている。「成田左衛門佐家中之覚」と題した文書である。

八十貫、山田（領地、山田、羽尾、土塩）、
 賛田せつのかみ摂津守が最高の禄高となっている。（当
 時、永楽通宝が通貨として使われ、二五貫が
 百石とされたが、やや変動があり、約一二五
 石が一般的とされたらしい。）八十貫は約四百
 石となる。

次に本町に関係する武士と禄高を紹介しよ
 う。

- 二十貫 春野原住、賛田ひらやう摂津守長子、後山
 田住 賛田ひらやう兵庫守
 - 二十貫 大谷住居 賛田さど摂津守弟 後土塩
 住 賛田 佐渡守
 - 四十貫 下福田 小高 大和守
 - 二十貫 下福田 小高 監物けんもつ
 - 二十貫 上福田 石川 伊賀守
 - 二十貫 上福田 石川 右近正
- 以上七名がいる。このうち次の二名が本町

に関係すると思われる。

- 二十貫 吉野 出雲守いづも
- 二十貫 石川 隼人

熊谷市竜淵寺に残る「成田分限帳」に載る
 者は、七十貫 野沢駿河守まががわと二十貫 石川隼
 人のみであり、他の者の名はみることができ
 ない。おそらく、忍城（現行田市）成田氏とな
 らなかのかかわりを持って禄高を与えられ、
 生活していたものと思われる。

忍城は、関東七名城のひとつで平地にあつ
 た四名城（三山城あり）として名高い城であ
 る。名城といわれるのは築城して一度も落城
 しないことからいわれているものである。

しかし、天正一八年（一五九〇年）の豊臣秀
 吉の小田原攻めの際、後北条方に属し、石田
 三成らの攻撃を受け、後北条家の降伏とともに
 落城した。しかし、この二三騎が城のどこ

で戦ったか記されていない。落城後、成田氏は那須烏山城^{からすやま}移封となり、二三騎も烏山城詰めとなったが、次の成田泰親^{やすちか}が城を去ったことにより、南族二三騎は共に帰郷し、帰農したと考えられる。

ここに登場した旗下、小高大和守は上福田、福田小学校の東側の小高い丘のうえにある七観音堂あたりに館を構えていたと伝えられるが、城館跡とは考えがたい。現在、この丘には小高大和守の偉業を書いた「番場七観音碑文」が残されている。

(広報二二八号 昭和六一年十月)

「滑川ふるさと散歩道……」③ 木曾義仲の末裔

律令制度が崩壊し、荘園制が盛んになると、その警備の必要から武士団が発生した。やがて、源氏と平氏の二大勢力が台頭し、政権の行方は栄華を極めた貴族の手から武家へと移っていった。

一度は平氏に敗れた源氏は源頼朝が挙兵すると、木曾義仲、源義経、源範頼らが呼応、各地で奮戦して平氏を壇の浦で滅亡させた。全国六六力国を掌握した頼朝は、一一九二年鎌倉に幕府を開き、武家政治がここに確立した。この時代は、畠山重忠^{はたけやましげ}や熊谷直実^{くまがいなおざね}などに代表される武蔵武士が歴史の舞台に登場し、活躍した画期的な時期である。

さて、木曾義仲であるが、武勇の達人として知られる源義賢よしかたの子として生まれ幼名を駒王丸といった。源氏の勢力争いが発端となった大蔵合戦で源義平勢に敗れた父義賢が討ち死にすると、家臣も四散した。駒王丸は義平らの執拗な詮索の目から逃れ、遠く信州木曾に隠れ養育された。この木曾で成人したのが、あの木曾義仲である。

平氏追討の令旨を受け、俱利伽羅峠くろがらの合戦で平家を破り、勢い京都に迫り西海に平氏を走らせ一躍天下にその名を轟かせたのである。しかし、頼朝と折悪く、頼朝の差し向けた義経らの軍に敗れ、敗走中、流れ矢にあたりに非業の死を遂げている。

義仲には義高という子があつたが、頼朝に人質に取られていた。義仲討ち死にの悲報に鎌倉脱出を企てたが、発覚、入間川畔で追っ

手に殺されてしまった。これで義賢の系統は滅亡したものと思われた。

ところが、義仲には桜木局さくらぎのつばねという側室がいた。信濃国筑摩郡栗本邑の馬場仙竜の娘である。木曾義次郎と名付けられ、義仲戦死の時、三歳であつた。六歳の時、今度は母を失った義次郎は、悲嘆にくれたが、祖父義賢の遺臣の子孫が武蔵慈光寺（現ときがわ町）の近辺に居住の由を伝え聞き、この地にやってきた。以後は遺臣たちの関係者の世話になって暮らしをたてることになった。苗字も改め、母方の馬場姓を名のり、成人後、遺臣のひとりに移り住んでいた福田郷（現滑川町）に定住するようになったのである。

この子孫が永正年間（一五〇四年から一五二一年）小田原後北条氏の家臣となった。この時、姓を栗本と改め以来五代にわたり、後

北条家の旗下として仕えた。しかし、この四代目 栗本備前守義高くりもとびぜんのかみよしたかは天正一八年（一五九〇年）豊臣秀吉の小田原攻めにあい、箱根、山中城で奮戦むなしく討ち死にした。父の最後には小田原方の形勢不利と察知したその子栗本右京義房は福田郷に帰郷し農民となった。この模様は「木曾家引略記」（現ときがわ町 萩日吉神社蔵）に記されている。

この子孫はやがて、太平の世となった江戸時代は長く庄屋を務め、文化人を輩出するなどその実績を多くとどめている。また、年代は判然としないが、苗氏をまた、栗原姓を名のり現在に至っている。（滑川村史より）

（広報二三八号 昭和六二年八月）

「滑川ふるさと散歩道……」④
浅間神社と鰐口
わにぐち

森林公園西口から県道を隔てて西南の方角に見えるお椀を伏せたような小山の上に浅間神社がある。林相は赤松、桜、アラカシ、コナラ等からなり、特に春の桜の景観は見事である。

急勾配の参道を登ると、眼下に広がる水田の美しさが目にとまると。頂上にたえずむと悠久の歴史がよみ



浅間神社鰐口

がえり深遠な気持ちになるから不思議である。この神社の祭神は、木花咲耶姫命（きはなさけのひめのみこと）と源義賢（みなもとのかた）である。武勇の達人として知られた義賢は、今から八五七年前の久寿二年（一一五五年）武蔵大蔵（現嵐山町）の戦いに源義平らに敗れ討ち死にした。その遺臣がこの辺に住むようになり、元久二年（一二〇五年）義賢の霊を祭ったのが浅間神社で武蔵武士の崇拜の山であった。古くは、参道下の平地で流鏑馬（やぶめ）を行っていたといわれる。

浅間神社は、雨乞いの山としても信仰厚く、昭和四十年頃までは、獅子舞が奉納されていた。昭和二十年頃、拝殿わきの土中より偶然、鰐口が発見された。鰐口とは、神社の拝殿や仏道の前側の軒下つるす円く扁平な中空で、金属製の器具。横から見ると、下側の割れ口の形が鰐の口に似ていることから、この名前

がある。

この鰐口は、宝徳二年（一四五〇年）の銘で「福田郷」の文献でみる初めての登場で貴重な文化遺産である。

（広報二〇四号 昭和六十年八月）

■滑川ふるさと散歩道……⑤

天神山横穴墓群を訪ねて

「横穴墓」という言葉を聞いたことのない人でも、「吉見の百穴みたいな…」と言われるれば、きつとお分かりになることでしょう。実は私たちの住む滑川町にも「百穴」があったのです。場所は森林公園西口に近い天神山と呼ばれるところ。この横穴墓を紹介します。「横穴墓」は、現在各地で確認されていま

すが、実に九十割以上が比企地方に集中しています。では一体何故、比企地方にこんなにもたくさん「横穴墓」がつくられたのでしょうか。

これまでの研究によって、比企地方に「横穴墓」が出現したのは、西暦六百年前後（古墳時代）と推定されていますが、この時期には、「古墳」にも大きな変化があったと考えられています。つまり、西暦六百年前後（六世紀末から七世紀

初頭）には、前方後円墳や埴輪が消え、「横穴墓」と胴張りのある横穴式石室が出現するという新旧の墓制の



天神山横穴墓

交替があったようなのです。墓制は私たちの生活の中で最も保守的なものと言われています。これから考えられるのは、この時代に、比企地方の社会変革にかかわるような何か大きな出来事があったのではないかと考えられるのです。

現在、これらの背景については、吉見丘陵―旧横見郡（吉見町）に設置されたという「横穴式石室」（大和政権の直轄地）を管掌するため、難波（近畿地方）から渡来系氏族である「王生吉志氏」が移住して来たためではないかと推定されています。つまり、「横穴墓」は、胴張りのある横穴式石室とともに吉志集団の移住によって伝播された墓制で比企地方に広まったというのです。

もし、これが事実であったとすれば、「天神山横穴墓群」や胴張りのある横穴式石室をも

つ古墳・岩屋塚古墳（羽尾・裏郷）の他にも、羽尾の五厘沼窯跡群や寺谷廃寺など、吉志集団との関連が想定される遺跡が数多くあります。貴重な文化財であるといえるものです。

（広報二五号 昭和六一年七月）

■滑川ふるさと散歩道……⑥

秋日遊高根山記

今から一二九年前の明治一六年（一八八三年）九月に福田学校（福田小学校の前身）では、教師の神山熊蔵先生が中心になって「芸林新誌第一集」という生徒の作文集を発行しました。当時の学校は光栄寺（現吉田氏宅）の建物を借りていました。作文集の中からその時、福田学校中等一級生であった文章を次に掲げ

ます。

「川ノ美ヲ以テ賞セラル、者ハ荒川也 山ノ奇ヲ以テ愛セラル、者ハ仙元山也 遠望ノ佳ヲ以テ称セラル者ハ、高根山也 余常ニ此ニ遊ハント欲ス 偶佳日ヲ得 佳友ニ逢フ 是ニ於テ徐歩漸ク山巔ニ達ス 時ニ紅葉秋ニ酔ヒ妖艶爛然尤モ佳ナリ 北ニ荒川アリ熊谷アリ 翠碧皎潔亦佳ナリ 東南田畝萬頃青黄斑白亦佳ナリ 西ハ山峯巍々亦佳ナリ 既ニシテ晚鴉西ニ去リ娉娥ノ東ニ催スアリ 乃チ割愛帰路ニ向フ 於是歎曰此遊ヤ佳ナリ 独リ此記ノ佳ナラザルヲ」

これをほぼ直訳すると次のようです。

（川）の美を称えられているのは荒川 山のめ



ずらしさを愛されているのは仙元山 遠望して奇麗なのは高根山 僕は常づね高根山に遊びたく思っている たまたま秋晴れの日に親友ととぼとぼと高根山に登ったのだ 山は紅葉の錦にきらめいて 北をみれば荒川の流れて熊谷の家並みが青くと輝く 東南を望めば緑と黄金色の斑紋の田んぼ 西を見はらせば峯々が高々とそびえる もはや夕方となりカラスは西の空に消えぼっかり月が東の空に浮かぶ 眺めつきない景色を惜しみ家路につきつつ 感慨がおのづから湧いてきた 山遊びの何と楽しいことか 高根山の素晴らしさよそれにひきかえ僕のこの文章はなんてさまだな

この文集を書いた長嶋清作は時に一三か一四歳の少年でした。今の中学二年生ということでしょうか。当時の学校教育は「読み・書き・そろばん」が主流の時でした。作文はそ

の応用ともいべき教科でした。それにしてもこれだけの漢字が使いこなせたというのはこの生徒の並々ならぬ勤勉のほどが伺えます。

高根山は熊谷市(旧江南町)に接する高さ一〇五メートルの山です。南及び東には高根カントリー倶楽部があり、ゴルフ客で賑わっていて当時の景色とは変わっています。旧福田村地区では一番高い場所でした。頂には高根さまの石の祠があります。毎年四月二十四日には、円正寺と榎(中在家の一部)たちがここに集まり、まつりが執り行われています。酒を飲んだり団子を食べたりして……。高根山は、昔から信仰の山として、地元の人達と深いつながりをもっています。

(広報一九七号 昭和六十年一月)

滑川ふるさと散歩道……⑦

福田鉱泉の由来記



福田鉱泉

福田小学校から北へ一・二キロほどのところに湯谷^{ゆや}の地名を持つ地区がある。ここに皮膚病に効くことで有名な福田鉱泉がある。長い間、渾々と湧いた鉱泉も今では細くなり、昔は湯治客で賑わっていた面影はなかった。

この湯泉の由来は古く、今から約一二〇〇

年ほど前の大同二年（八〇七年）この地に住んだ蓮海という僧が傷を負った鹿が平癒していく姿からこの湯の効

用を発見し、里人に教えたと伝えられる。

また、近くの岩窟より現れた薬師如来のご出現の尊きを拝し、寺を造営し「徳水山 蓮花寺」と号し、近くには湯前権現を祭ったと言われる。この湯の効用も広く知れ渡り、寺も栄え平穏な時代が続いたが、やがて室町期のうち続く戦乱の世となり、鎌倉への往来激しく、戦禍に巻き込まれた。百姓、僧も立ち去り、寺も大破されたと文献に記されている。

久しく荒れ果てたこの地に住んだのは、天正一八年（一五九〇年）豊臣秀吉の小田原攻めの際に、後北条方に属し落城した鉢形城（現寄居町）ゆかりの武士であったと伝えられる。

その後、湯屋小屋も再興されて、その効用は近年まで人々の知るところであり、その恩恵に浴してきた訳である。栄枯盛衰は世の常とはいえ、この地にも幾多の歴史が刻まれた



A コース



真福寺の鰐口

これは明治七年廃寺となった真福寺に属するものである。かつて真福寺の檀家であった石川氏宅には「真福寺の鰐口」と通称する父祖の代か

ことも見逃せない事実である。

(広報二〇五号 昭和六十年九月)

■滑川ふるさと散歩道……⑧

真福寺の鰐口

福田小学校わきの道をわずかに北に進み、民家を左に折れた小さな谷戸の北側の丘のう

ら伝わる町指定の文化財がある。すでに、「浅間神社の鰐口」で触れてあるとおり鰐口とは金属製の音を出す器具である。この鰐口にはタガネによって次の文字が彫り刻んである。

表「奉寄進武芻比企郡福田郷別所真福寺鰐口」

裏「明應四年乙卯正月十八日檀那同所四郎太郎」

(フリガナは分かりやすくするために付けたので実際にはないもの)

明応四年は今から五一七年前で、西暦一四九五年のことである。鰐口には次のような由緒書きが添えてある。

「天正十八年の豊臣秀吉の小田原攻め(後北条氏攻め)の際、福田真福寺に通りがかった秀吉配下の兵士が寺に掛けてあった鰐口をい

くさに使うための鐘として奪い去った。小田原近くの心福寺という寺の前まで来ると兵士はこれを投げ捨てた。その上に塵や土が積もり、草が生え樹木が繁り、やがて数百年の星霜が流れた。時代は下り江戸時代となり、ある時、心福寺の近くの人が杉の木を買い入れ、それを切り倒し、根を掘っていたところ、思いもよらず唐鍬の先にあたるものがあつた。鰐口である。以後心福寺の寺宝としてきた。

文政十二年の春に福田村の名主石川清兵衛は役所で江戸は神田の肴屋に投宿した。同宿したのが小田原城近在の心福寺がある村の名主でたまたま鰐口のこと話題に上がった。不可思議な話もあるものと、帰村した清兵衛は真福寺の檀家の人々にこのことを話した。衆議は一決し、鰐口を真福寺に請け戻そうということになり、総代二名が心福寺へ赴くと

心福寺の方でもこれに心よく応じてくれたので、鰐口の代わりとして鍔鉞にようち(西洋打楽器のシンバルと同じような二面で一对の仏教楽器)を心福寺に納めて帰村した。以来、真福寺の寺宝として鰐口は丁重に保存することになった。」

この鰐口を巡っては、さらに興味深いことがあつた。以下にそのことを記していこう。

昭和六十一年の晩秋、神奈川県高座郡寒川町役場(平塚市の東隣にある人口約四万七千人の町)から封書が届けられた。中身は寒川町大字岡田の三沢恵一家と三枝竹常家に保存されている古文書コピーであつた。内容は次のようである。

「奉寄進武□比企郡福田郷別所真福寺鰐口
明應四年卯正月十八日檀那同所四郎太郎



(鰐口の)丸差渡し七寸阿つさ壹寸八分貫目六
百八拾目

天保八年酉三月十八日二はり出し

右の鰐口はり出しそうろう場所は観護寺の
内、第六天(社)の脇に五尺程の松の木これ有
り、その根をほり五尺程土の下に、右鰐口こ
れ有りそうろうなり。同九年戌の年二月六日
に至り武州比企郡福田村真福寺旦那家の者ども
二人参りそうろうにつき、取り替えのため観
護寺へ鋤鉋寄進いたしそうろう。右代金
として金三分差し置きそうろう以上―

()内およびふりがなや句読点はこの文章
の執筆者

この古文書の内容を全面的に信頼するとす
れば、真福寺の鰐口をめぐる不思議な伝説は
迷宮入りを免れることになった。由緒書きの

作者の思い違いが判明したのである。すなわ
ち、小田原近在にあったとされる心福寺は実
は観護寺であり、鰐口は杉の木の根元ではな
く、松の木の根元から掘り出したものであつ
た。そして、福田村の真福寺の檀家の人が鰐
口を請け戻しに、はるばる観護寺へ赴いたの
は文政十二年ではなく、文政九年(西暦一八
二六年)のことであつた。さらにその際、直
接鋤鉋を寄進したのではなく、金三分(四分
で一両)を持参したのであつた。

ともあれ、寒川町の古文書の存在により、
真福寺の鰐口が武蔵国と相模国を、人と人の
心と手を介して往復したことは紛れもない事
実として考えてよいようである。これを鰐口
がとりもつ仏縁と言わずして何と表現すべき
であろうか。

(広報一九四・一九五号 昭和六二年一・二月)

成安寺縁起

福田一二〇五番地に所在する成安寺は、現在曹洞宗であるが、その昔は天台宗であったらしい。寺の縁起をみてみると宝亀九年（七七八年）に庵を結んだことが記されている。

縁起書では次のようになっている。

「宝亀九年、白髪
の翁人がどこからともなく福田の地にやって来て住みついた。当時の福田は自然林がうっそうと繁り、蛇などの、は虫



成安寺

類も多く、一日中霧で覆われ、日の光があまり差し込むことがなかった。里人は、何とか霧が晴れば作物もできるのにと日々悩んでいた。これを聞いた老人は、私が何とかしてみよう。と以来百日の観音経を唱えたという。百日目の朝、夢まぐらに馬頭観音菩薩が現れ、汝の願い聞きとどけた！といって姿を消した。すると、それから次第に霧が晴れ、農作物もよく取れるようになったという。以後老人は感謝報恩のため自作の馬頭観音像を作り、小さな庵を結んでこれを「晴照庵」と名付けた。成安寺の最初の名である。

鎌倉時代になると、伝えを聞いて高野聖の笠周（さししゅう）という僧が晴照庵に何年か住み、晴照庵を再興し帰る時、供養のしるしとして板石塔婆を建立したという。（建長三年（一二五一年）の銘がある。）



A コース

文明年間（一四六九年から一四八七年）に晴照庵東福寺、慶長十一年（一六〇六年）に成安寺と改めた。」という。

晴照庵は、今馬頭観音堂が建っている南側の小高い山の上に建てられ、数回建て替えられて現在の場所に成安寺が建てられた。東向きに建築された神社仏閣は、古い歴史を持つものが多いと言われている。

古代は、信仰も自然崇拜的なもので神仏以前のものであった。寺の裏山に連続する台地は古墳時代の人々が住んだ住居跡が広範にのび、前方北に突出する舌状台地に寺前古墳群が所在し、歴史的背景を保っている。

成安寺を再興したのは福田を知行した旗本酒井与九郎重勝で、福田に陣屋を構え家臣に政務をまかせたとう。今から四百年前のことである。現在でも多くの文化財（町指定二）を

残し、人々の心を楽しませている。

（広報二〇九号 昭和六一年一月）

■滑川ふるさと散歩道……10

福田の馬頭観音さま

昔々、この地方は湿気が多く、大蛇の住むようなところで山や谷が極めて深く、日中でも太陽を仰ぎ見ることができなかつたという。
やまもとけのむかし
日本武尊が東夷征討の時、この山谷に馬を進められ、すこぶる難波を極められたと言う話が福田村の状況を語る伝説として残ることに伺われる。

奈良時代の宝亀九年（七七八年）ころ、どこからともなく白髪の老僧が当地に来了。里人がこの僧にいうことには「この地は、霧が深



馬頭観音堂

く陽がなかなか差し

込まない。この霧が

なくなれば、色々の

作物もできどんなに

有難いことか。」そ

れを聞いた老僧は里

人を安堵させたいと

願ひ、百日の大祈禱

を行い、十方諸仏に

観音経を読み満願の日の夢心地の間に馬頭明
王が現れ、「僧よ！汝の願い聞き届ける。」と
の言葉があったと思う瞬間、目が醒めた。老

僧はさらに精魂傾けて観世音に祈ったところ、正月十九日から四辺に立ち込めていた霧
がすっかり晴れるようになり、村人は大喜び
であった。老僧はここに庵を結び「晴照庵」
と称し、自作の馬頭尊像を安置したと伝えら

れる。

その後、時は移り久しく荒れていたこの草
庵を鎌倉時代の宝治二年（一二四八年）、高野
聖のぜいしやう笠周という僧が再興し、建長三年（一二
五一年）に帰る時、供養の印として板石塔婆
（町内最古）を建立した。この板石塔婆は、観
音堂裏に現存する。

馬頭観音由来記（成安寺保存）に書いてある
ため、すべて正しいと解するには難がある。
しかし、板石塔婆が建てられる様になるには、
高野聖の積極的な造立活動があったと考えら
れ、すべてを否定するわけにもいかない。

また、戦乱の続いた時代、武運長久の祈願
をした人々は遠近から集まったといわれ、江
戸時代の初期の元和元年（一六一五年）、群馬
県世良田（現太田市 旧新田郡尾島町）の長楽
寺の門に入った三河守頼円が、諸国行脚の途



中、この晴照庵にとどまったり、親しかった
正田隼人と毎年年賀に参加し、馬頭尊祈願を
したという。

話は戻るが、晴照庵は信仰厚きところとな
り、次第に堂宇を拡張していったが、天正三
年（一五七五年）東福寺と称されるように至
り、慶長十年（一六〇五年）九月成安寺と改号
し、寺が建立された。開基（寺を建立した人）
は、福田村を知行した旗本酒井重勝である。

この成安寺に残る文化財は多く、建長三年
の板石塔婆、小林三徳が奉納した算額、愚禪
和尚の「不許葷酒入山門」（葷酒^{くんしゅ}山門に入るを
許さず）の石標、そして朱印状、旗本酒井氏
累代の墓域等が現存する。

（広報二二五号 昭和六二年五月）

「滑川ふるさと散歩道……」⑪ 竹二坊と俳諧

滑川町で俳諧が盛んとなったのは文化十年
（一八一三年）以降のことと思われる。これは
時代の趨勢もあろうが、当地では下福田・大
木の出身で医師となつて伊賀国（現三重県の
一部）藤堂侯の侍医となり、また俳句の知名
な宗匠にもなつた竹二坊が文化八年侍医を辞
して帰郷、大木に隠居して附近の志望者に俳
諧を教え、数年後には当地が俳諧の中心地と
なつたからであろう。

このように竹二坊は俳諧の秀れた師匠であ
るが、惜しいことに資料に乏しく実績は近年
まで判然としなかった。ところが、知人の厚
意で寄せられた資料を詳しく読んでみると、

不明だった彼の履歴の二、三が分かって来たのでまとめてみると次の通りである。

竹二坊は宝暦九年（一七五九年）福田村大木、権田家の三男に生まれる。幼時から賢く、長じて医を志し、江戸の皇漢医学の大家、真曲瀬家に入門し医術を習得、選ばれて伊賀・藤堂伊賀守の侍医となる。医業の余暇には、茶道に勤しみ、俳諧は正風美濃派の宗匠五箕庵の傘下に学ぶ。この美濃派は多くの派に分かれ、異風を立て混乱し、正風の名を汚していた。竹二坊はこれを正すため、藤堂家秘蔵の芭蕉翁が書いた正風の真義を示す重要文書を刊行した。これが「芭蕉翁正伝・竹二坊編寛政十年刊行」である。注目されるのは藤堂青吟が編者の功を称えた跋分を書いている事である。

竹二坊は生来、眼があまり良くなかったが、

五十歳を過ぎる頃から視力が衰え、文化八年帰郷し、それ以後の彼の生活は前記の通り当地方の俳人の指導であった。また、有名な国学者清水濱臣もついて和歌を学んだのも帰郷後のことであった。「天保六年（一八三五年）追悼句集による」

この縁で竹二坊が濱臣を越生の梅林の花見に招待した。年代は不明だが、文化十二年頃と思われる。濱臣は一人で来たが、花見には自得（竹二坊の別名）とその弟子の芝山が案内した。濱臣は往復十二日間のこの旅の見聞を都支山日記と題する紀行文に残している。

次に彼の遺跡について述べるが、墓石は旧役場跡の十字路を北に坂を登って百餘ぐらい行くと道路沿いにブロック塀で囲まれた墓地がある。石段を登り数歩ゆくと右側に横にして台石に乗せてあるのが竹二坊夫妻の石塔で



ある。下部が欠損して法名も一部は不明である。お寺の過去帳によれば、「天保六年十一月廿六日弄花院ろうかいんげつよ月ごとうしんし誉五道信士」とある。

また、伊古神社の拝殿脇に雨乞いの碑がある。これは文政の大干ばつの際、竹二坊が祭神の速御玉はやみたまひめ比売に降雨を祈った和歌を奉納したところ、たちまち黒雲空を被い大雨が降り救われたという。これは、竹二坊の歌道の才と祭神の神徳を称えたものであろう。

（文化財保護委員筆）

（広報二二七号 昭和六二年七月）

Bコース(西部)

Bコース



- ① 和泉の文化財(和泉地内 泉福寺)
- ② 八宮神社を訪ねて(和泉地内)
- ③ 町で一番高いところは(伊古地内 ニノ宮山)
- ④ 伊古の地名の由来(伊古地内)

和泉の文化財

滑川ふるさと散歩道……①

今から七千年ほど前の縄文時代早期には既に和泉の船川遺跡からは土器のかけらなどによって人間の生活していた痕跡が認められる。その後、同じ船川遺跡では弥生・古墳の両時代も引き続き人々がくらしした住居跡が発掘されている。

和泉が文献に最初に見えるのは、鎌倉幕府が編んだ「吾妻鏡」という歴史書の中の建久四年(一一九三年)二月十日の記述である。そ

- ⑤ 伊古乃速御玉比売神社(伊古地内)
- ⑥ 慶徳寺(中尾地内)
- ⑦ 伝説の沼 両頭庵沼 中尾地内 両頭庵沼



重文阿弥陀如来座像

ここには鎌倉幕府の初代将軍 源頼朝がかつて世話をしてくれた毛呂季綱へ褒美として「武蔵国泉勝田」の土地を与えたことが記してある。泉は今の和泉のこと、勝田のことと考えられる。このことと直接関係があるか不明であるが、和泉には三門という地名があり、そこには中世ごろと思われる館跡が残っている。

この三門館跡と田んぼを挟んだ向い側に、北から南の滑川沖積地へ伸びるなだらかな丘陵があり、その先端近くに泉福寺がある。この寺院には阿弥陀如来像

と、その脇侍の観音・勢至の立像（いわゆる阿弥陀三尊）があり、阿弥陀は国指定重要文化財で、観音・勢至は県指定有形文化財となっている。阿弥陀の胎内（ここでは像の腹部の中）には一三二文字の墨書がある。それによると鎌倉時代の中ごろの建長六年（一二五四年）に阿弥陀三尊を修復したことがわかる。亡き母の霊が成仏して極楽へ行けるように、また、自らの現世の無事と来世の安楽を願って修理されたのだという。

ところで、三門館跡や泉福寺の周辺からは、金箔を押したもののほか多数の板碑（中世の石造遺物）が見つかっている。江戸時代の古文書の中には村明細帳も久保家から発見されている。和泉集会所の北の丘陵の中腹には明治時代に廃寺になった円福寺がある。

このように古い時代からのさまざまな文化

財が和泉には散在している。

(広報二〇一号 昭和六〇年一月)

滑川ふるさと散歩道……②

八宮神社を訪ねて

和泉の上地区に向い、熊谷市(旧江南町)の塩に抜ける道路を進むと、左手の高台に国の重要文化財である阿弥陀如来像が安置されている泉福寺が見える。さらに、進み、右へ曲がり坂を登りつめたところに八宮神社がある。永々といきづいた古木が社殿を囲むように生い茂り、この神社の歴史をうかがわせる。滑川村史によると八宮神社は「勧請年期末詳寛永二年(一六二五年)三月鎮守社とす。また、明治四年三月村社の格に列する。」とある。

隣接する菅田地区は以前一つの村で鎮守として厳島神社を祭っていたが、戸数が少ないため、大正年間に八宮神社を鎮守とするようになったといわれる。

八宮神社は須佐之男命すさのおのみことの高徳を仰ぎ、里の人々がこの地に祭神として奉祀した。この須佐之男命は古代の説話として有名な八俣の大蛇を退治した英雄である。この神は、豊穰をもたらすとも、厄病をはらうともいわれ、祭神として祀られる神社は全国に数多くあり、京都の八坂神社はその代表的なもののひとつである。

さて、社地を含む小字の由来であるが、これがロマンに満ちている。「八垣」という須佐之男命の詠歌の中の「八重垣」より選んだものと伝えられる。

日本最古の歴史書である古事記にその詠歌



が出て来る。紹介しよう。「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」と詠んだ。これは妻の櫛名田比売と出雲の国を歩き、宮殿の敷地を探し求め、須賀という場所に来た時、「わしの心はたいそう清しい」と感慨をもらし、建てることを決めたその時、そこから立ち上る雲をみて詠んだものといわれる。

このような須佐之男命が祭神として祀られるのも最もなことであろう。この八宮神社も遠い昔から、人々の素朴な願いや喜びの声を聞き続け、信仰の厚い神社である。木漏れ日を受けながら、深遠なるこの神社。神の御前で手を合わせずにいられない日本人の心を想いながらこの聖地を後にした。

(広報二二六号 昭和六一年八月)

「滑川ふるさと散歩道……③」 町で一番高いといふのは

滑川町は、東西約五キロ、南北約七キロと南北に細長く、面積二九・七一平方キロで、北武蔵丘陵の北端に位置しています。地形は高からず低からずの丘陵地で、谷が巧みに入り込んでいます。そんな町の西方に二ノ宮山、大立山、高根山という滑川町を代表する海拔百メートルクラスの山があります。中でも二ノ宮山は海拔一三一・八メートルで一番高い山です。

昔から二ノ宮山には、二ノ宮山山頂にある松の木に蛇を縛り付けると、蛇は天に昇って竜となり雨を降らせる、こんな言い伝えがあります。実際に、松の木のそばに「八代龍神」の碑があります。雨乞いには、蛇というわら

で作ったへびを使い、そのしんには生きたヤマカガシをいれるそうです。地元伊古の人々にとって、二ノ宮山は、農作業などについて深い関係があったのでしょうか。

その伊古の人たちが二ノ宮山に登る日があります。四月十五日です。この日は榛名講といって、二ノ宮山山頂の榛名神社の社前で祭りが行われます。この外、山遊び、花見という行事もあり、伊古の人たちは、こういった行事を通してその信仰を伝えていきます。



二ノ宮山

この山頂に平成六年、ふるさと創生事業として、町のシンボルとなる「二ノ宮山展望塔」が建てられました。歴史的な区切りとして二十一世紀

にちなんだもので、二一坪あります。この展望塔からの眺めは壮大で、遠く新宿副都心や筑波山、浅間山などの大パノラマが広がっています。

展望塔への周辺の整備がされる中で、地域の食材を生かした体験型の交流施設が平成二年四月オープンしました。また、釣りや果物狩りができる施設も徐々に整備されて、「伊古の里」として訪れる人たちを楽しませてくれています。

（広報一九五号 昭和五九年十一月に加筆修正）



■滑川ふるさと散歩道……④

伊古の地名の由来

「寝物語」が地名であると聞いたなら、たい
ていの人は驚かれるでしょう。実は、古い中
仙道沿いにあった「むら」の名で、溝一つ東
側が岐阜県、西側が滋賀県というところ。か
つて、奥州に落ちのびる義経を追ってきた静
御前が、美濃・近江が隣り合うこの里で、義
経変装の家臣と巡り合い、その境遇を語り明
かした場所の名前である。この話のように、
地名には、思いもよらぬ歴史が隠されている
ことがある。ただ、地名の由来については、
それを裏付ける決定的な資料がないことがほ
とんどで、その正確な出自をたどれるものは
数少なく、町内ではここに紹介する「伊古^{いこ}乃

速御玉^{はやみたま}比売神社^{ひめ}（伊古神社）にちなむ地名な
どが挙げられる。

「伊古神社」は、今から千年程前に編まれ
た「延喜式」という法典の中に記載された当
時の比企郡内で唯一の式内社であったといわ
れ、大変由緒ある神社である。この神社は、
別名「淡洲明神」ともいい、江戸時代には「郡
中の総社」として崇められていた。当町域内
のいわゆる「鎮守さま」に淡洲社が多いのも
これを勧請したためである。明治六年には、
郡の中で最初の「郷社」に昇格している。

現在、大字の名として残る「伊古」という
地名は、言うまでもなくこの由緒ある神社の
名にちなんだものであるが、この他にもこの
神社にちなんだ地名がいくつか残っている。
たとえば、合併前の「宮前村」などは、この
神社の歴史的価値を尊重し、お宮の前にある

村という意味を込めて名付けられたものであるし、伊古の小字の名として残る「郷社前」「郷社後」なども、すでに述べたように、かつてこの神社が「郷社」であったことに由来している。

近年、都市化の急速な進展に伴い、各地で古い地名が消え、新しい地名が誕生している。市町村ひとつをとってみても、統廃合がたびたび行われて移り変わり、このままでは名前の誕生したいきさつさえ後世に語り継ぐことが難しくなるかもしれない。せめて、自分の住む町の名前の由来ぐらいいきちんと知っておきたい。単なる地名には歴史の意味のあることを理解し、大切にしていきたいものである。

(広報二二四号 昭和六二年四月)



伊古乃速御玉比売神社

「滑川ふるさと散歩道……⑤」
いこのはやみたまひめじんじや
伊古乃速御玉比売神社

この神社は伊古にあり、祭神は息長足姫命（神功皇后）、大鞆和氣命、武内宿祢命である。

今から千年以上前にあった「延喜式」という法典の中に全国各地の神社名が載っている。当時の比企郡内（今の東松山市、滑川町

の大部分・嵐山町の一部）が該当するという説が有力）にはひとつだけあった。伊古乃速御玉比売がそれである。

社伝によると当初の神社は二ノ宮山に鎮座していたが、文明元年（一四



六九年）に現在の地に移ったという。江戸幕府が文政七年（一八二四年）ころに編んだ「新編武蔵風土記稿」には移った時を天正四年（一五七六年）としており、約百年のずれがある。しかし、これらの伝承から遷座の事実はほぼ明らかである。

神社のすぐ北側に天台宗の円光寺と薬師堂がある。明治初期の廃仏毀釈（仏教を排斥すること）前までは神社は円光寺持ちであった。本地垂迹説（神と仏が同体だとする説）により、本地仏としての薬師如来が神として社地に仮の姿を現したとする信仰に基づいている。本殿の建築様式は住吉造で、屋根は茅葺になっている。

社の森は埼玉県指定の天然記念物であり、アラカシ・モミ・アカシデなどの樹木が茂っている。拝殿の前には安産の信仰を集めた「は

らみ松」があったが、松くい虫にやられて立ち枯れてしまった。境内には、社務所・八幡社・雨乞いの碑・芭蕉の句碑・花火の竹筒・井戸など見る物に事欠かない。

また、幟のぼりの社号は幕末・明治期の政治家として知られる勝海舟の書である。明治十四年（一八八一年）九月に当時の伊古村の人々の熱心な要請によって海舟が重い腰をあげ揮毫（書画をかくこと）したものである。

（広報一九九号 昭和六〇年二月）

■滑川ふるさと散歩道……⑥

慶徳寺

中尾の加田にある薬王院医王山慶徳寺は、眼病にご利益のある薬師様で知られる曹洞宗



慶徳寺薬師堂

の寺院であり、比企・入間七二か所の札所にもなっている。

三代住職徳忠は永平寺の住職に就き、時の天皇から禅師号と紫衣を賜った由緒ある寺である。四十の末寺を有する寺は、古くは東の高台に本堂があったが、火災により焼失し、当所の地頭岡部太郎作の援助により、十九代梵良のとき、現在の地に再興したと文献に見える。

四天王門を入ると、北側に三つの山門が見える。中門の鐘楼にかかる鐘はかつて人間国宝であった故鹿取正彦氏の高弟で故鍋田力氏が制作した見事なもので

趣き深い。南側には長い石段があり、高台には元禄時代(江戸時代初期)の建築様式を伝える貴重な文化財である薬師堂がある。広い境内地にこれらの十余の諸堂と庭園がうまく調和し、静かなたたずまいを感じさせる。

さて、薬師様。ここには目に関する多くの絵馬が奉納され、逸話も伝えられている。それによると、薬師様裏の井戸水で洗眼すると眼病によく効いた。全快すると礼として沼に鯉を放す習わしがある。すると鯉は半眼の鯉となり、身代りになってくれるという話である。この話にもわかるように、民衆の信仰の厚さがうかがわれるものである。

(広報二二一号 昭和六一年三月)



滑川ふるさと散歩道……⑦

伝説の沼 両頭庵沼

中尾の加田地区に美しく澄んだ水をたたえる沼がある。両頭庵沼または、用土庵沼と呼ばれる。

大立山の東側に位置するこの沼の堤にたたずんでしばらく沼を観察してみた。みると、流れる雲とまわりの木々が水面によく映っている。静寂の中に、時折、聞こえる野鳥のさえずり。美しい景色の中になんだか吸い込まれそうになるから不思議である。この沼に伝説があるのも当然のように思えてきた。ここに紹介しよう。

この沼のほとりに御堂があり、そこに、娘とおじいさんが住んでいた。娘は神通力をも

ち、人々の病気を治したという。ある年、干ばつ見舞われ、困り果てた村人は、この娘に雨を降らせてくれように頼んだ。娘は快く引き受けたが、ひとつ約束があった。それは、「私が祈っている七日七夜の間は絶対に堂に近寄ってはいけない。」というものだった。

村人は雨を待ったが、いつこうに雨の降る様子もない。あせった一人の男が七日目の晩、堂に近づき戸の隙間から中をのぞくと気



滑川郷土かるた

かせない水源であり、人々の暮らしに深く密着していたものと思われる。

（広報二〇七号 昭和六〇年十一月）

を失ってしまった。なんと中には、頭のふたつある大蛇がとぐろをまいていた。約束を破られ、のぞかれたことを知った大蛇は、驚き、怒り、堂を壊して外へ飛び出した。そのうち、空は、黒雲垂れこめ、雷が耳をつんざく。そして、大雨が三日三晩降り注いだ。村人たちは、喜び沼へ集まっていたが、そこにあつた御堂も、娘やおじいさんもなく、男が一人倒れていた。

やがて気がついた男は、大蛇の話をした。村人たちは、「あの娘は竜神様の化身に違いない。神様がわしらを助けてくれた。」と口々に言った。そして、村人たちは、沼のへりに御堂を建て両頭庵と名付けて、竜神様への感謝をわすれなかったという。

こんな伝説の残るこの沼も町に多く点在する沼と同様に農業用ため池として、稲作に欠

滑川ふるさと散歩道……①

羽尾神社 恒儀様



羽尾神社

なめがわ温泉花和楽の湯の横道を南に進むと石の鳥居が見える。羽尾神社である。なおも道なりに進むと、やがて、興長禅寺が望まれる。そこを直進すると、間もなく、五厘沼がある。このところは、古い登り窯の跡で有名である。

さて、羽尾神社は、古来「恒儀様」と尊称された。これは祭神の一柱に藤原恒儀が祀られているからの尊称である。社伝によれば、石橋村(現

東松山市青鳥)に古城跡があり、その城主藤原恒儀の嫡子、恒政が父恒儀の遺言に基づき、家臣、設楽行連に命じて、倭建命並びに恒儀を相殿に羽尾の地に祀らせた。

古剣を安置して御霊代としてその銘に、「倭建命、天長六巳酉年鎮座」とある。天長六年(八二九年)は、今から一一八〇年余も前にあたる。羽尾神社と興長禅寺の間の丘陵地一帯を「堀の内」と称している。堀の内の地名は周囲に堀を廻らした豪族の屋敷跡を言う場合が多いようである。恒儀様と堀の内の関係は定かではないが、何か関連があるように思われる。恒儀様は非常な力持ちで角力が強く、大好きであったと伝えられる。鎮守様をお慰めるために、明治のころは大好きな角力を奉納し、なお、獅子舞等も行われ、にぎやかなお祭りであったようである。



また、幟旗は毛呂山町出身の幕末の国学者、権田直助による書である。明治一四年に羽尾の氏子たちの熱望に応えて直助が筆を執ったものようである。

※角力 すもうのこと

(広報二〇八号 昭和六〇年十二月)

■滑川ふるさと散歩道……②

愚禅和尚の筆跡をたずねて

愚禅和尚の筆跡は、今まで一二七点を集録していたが、滑川町で確認したものは二八点となり一番多い。(昭和六一年三月時点)

板石塔婆や石塔の愚禅和尚の筆跡は年齢三十歳代と六十歳代が各一点で、他のものは七十歳代から九十歳代のものである。その第一

号で三四歳の時のものが羽尾・興長禅寺の山門、右側にある。「禁葷酒」と隷書体で刻してある。高さ一六〇センチメートル幅四七センチメートルの中型だが、書体としては他に例がない。大きいのは、文化二年(一八〇五年)七三歳の「馬頭観世音」というのが、羽尾の悪戸・馬洗い場にある。高さ二五七センチメートルあり、この類のものでは最大である。前大乘愚禅老僧書花押とあるのも珍しい。下福田、成安寺入口にある石塔には、「不



愚禅の馬頭尊

許葦酒入山門」とあり、葦酒山門に入るを許さずと読み、これが正確な表現である。文化五年（一八〇八年）七六歳の筆である。変わっ

ているのは、下福田、両表・柴山の小墓地のもので舗装道路に面して三面八臂座像の馬頭観音がある。高さ八五センチ・幅三三センチの浮彫像の台座に愚禅和尚の「救病畜道・馬頭薩埵」の文字がある。また、コミュニティセンター入口の「庚申塔」も高さ一七九センチ・幅六〇センチ・厚さ一六センチと中型であるが、風変わりである。この種では、小川町大字大塚の大梅寺のものが二七〇センチと超大型である。

下福田古姓・西ヶ谷戸の路傍の「庚申塔」は正面、向かって左に九十翁愚禅花押とあつて右には、万延元年（一八六〇年）十一月吉日とあるから、執筆三八年を経て刻んだことになる。

また、中尾、加田・寺山の「庚申塔」正面

に前大乘九十七翁愚禅印、裏面に文政一二戌子年（一八二八年）十一月吉日とあり、尋常一様の説明では、解決しないものである。

額では、羽尾・興長禅寺山門に「羽尾山」がある。縦百センチ、横二一〇センチで草書に近い行書が書かれている。一般に楷書または楷書に近い書体であるから、これもめずらしい。下福田、両表の栗原宅管理の不動堂内には松板に刻した「不動尊」がある。縦六六センチ、横四六センチの典型的な楷書で文政五年九〇歳の筆である。

軸では、愚禅和尚筆跡の過半数を占めるが、その中でも「竜」が最も多い。特色のあるものでは、松竹梅の三幅一対が月輪、大塚宅にある。「松声千載髪」、「竹生雋才兒」、「梅経寒苦香」で文政三年（一八二〇年）八八歳の筆である。羽尾一区、設楽宅からも三幅一対が



あるが、前者と少し違う点もあるが、文政五年（一八二三年）九〇歳の筆である。月輪、宮島宅には「福聚海無量」の軸で文政二十一年（一八二八年）九六歳の筆だが、下福田・二ノ宮宅にも同様のものがある。

羽尾は愚禅和尚が出家された地であり、一山の住職として、はじめて晋山された地でもある。その興長禅寺には、次のような逸話が残っている。愚禅和尚は雨乞いの名人で本山大乘寺（石川県金沢市）火災の際、熊谷市原島の福王寺において呪文と共に西方に向かって水を投げたところ、その念力が本山に届いて、御礼の使者が来たという。

また、愚禅和尚の墓石が興長禅寺にそれは供養墓であって埋葬墓ではない。

大乘四十三董

当寺二十世無学愚禅大和尚

福王門山

とあるのがそれを物語っている。（昭和六十年 吉見町 長沢士郎氏筆による）

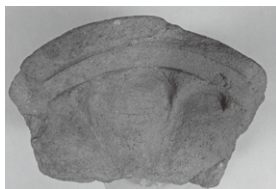
（広報二二三号 昭和六一年五月）

■滑川ふるさと散歩道……③

東日本最古の古代寺院跡

羽尾の寺谷にある興長禅寺西側には「寺谷廃寺」と呼ばれる古代寺院跡があります。

この「寺谷廃寺」は、飛鳥時代の仏教文化の中心であった飛鳥寺（推古天皇四年―五九六年創建）と同じ様式の軒丸瓦片が見つかっていることから、七世紀（六〇〇年代）前半に創建されたと推定され、現在のところ東日本で最も古い寺院跡と言われています。



寺谷廃寺出土瓦

では一体誰が「寺谷廃寺」を建立したのでしょうか。寺院を建立するためには、建築・造瓦など多くの技術を必要としますから、先進地の畿内から寺の造営ができる技術者を招来しなければならなかったでしょう。また、寺院が出現するためには、技術ばかりでなく仏教の受容という素地も必要です。このように考えると、「寺谷廃寺」は、畿内から技術者を招来することができ、かつ仏教に帰依した有力な氏族によって建立されたと言えます。

「寺谷廃寺」周辺には、六世紀末～七世紀初頭の操業が考えられている「羽尾窯跡群」と「平谷瓦窯址」という二つの遺跡があります。出土した遺跡の検討から、「寺谷

廃寺」と同様に畿内と密接な関係があったことや、特に「平谷瓦窯址」は「寺谷廃寺」に瓦を供給していた可能性のあることがわかっています。時間的にも、「羽尾窯跡群」→「平谷瓦窯址」→「寺谷廃寺」と断絶なく営まれており、同一系譜上にあったらしいのです。つまり、これらは同じ氏族によってつくられたのではないかと考えられるのです。「寺谷廃寺」や「羽尾窯跡群」が出現した西暦六〇〇年前後には、滑川町から遠く離れた大和(今の奈良県)の地で、蘇我氏や聖徳太子に支えられた推古女帝が国政を掌握していました。比企地方では同じ頃、横穴墓や横穴式石室などの新しい墓制が出現しており、その背景として「壬生吉志」の進出が推定されています。もし、事実であったとすれば、聖徳太子や蘇我氏と深い関係にあった「壬生吉志」によって、わ



が町にも推古朝の様々な文化がもたらされた筈であるから、「寺谷廃寺」の造営にも「壬生吉志」の関与した可能性が十分に考えられます。

(広報二一九号 昭和六一年十一月)

■滑川ふるさと散歩道……④

五厘沼窯跡群

今から一四〇〇年ほど前の西暦六〇〇年ごろに灰色の土器を焼いていた場所が羽尾の五厘沼窯跡である。大和(今の奈良県)では推古天皇のもとで聖徳太子が活躍していたころであった。この時期に使われていた土器は二種類が知られている。前代の弥生式土器の流れを引いた茶褐色をした土師器はじきと大陸や朝鮮半島の影響を受けた灰色の須恵器である。須

恵器は祝部式土器いわべしきどきと呼ばれるように、もともとは祭祀用具として作られたものだとされている。この須恵器を焼いていたのが五厘沼窯跡である。埼玉県では古い須恵器窯であった。出土した器種は、坏つき、蓋たかつき、高坏たかいへい、甕かめ、壺つぼである。五厘沼窯跡の周辺には古墳群、住居跡、寺院跡、瓦窯址などの遺跡があり、それらと五厘沼窯跡との関連性が注目されてきた。窯跡は埼玉県指定の文化財である。

ところで窯跡の発掘調査のとき、沼と窯の



発掘当時の窯跡

開設時期の前後関係が考察された。結論としては沼の方が古いだろうということだった。沼は稲作の用水源としての用途が

あったであろうから、五厘沼の水を使った米作りが、一四〇〇年以前から行われていたことが推測できるのである。

(広報二二〇二号 昭和六〇年六月)

■滑川ふるさと散歩道……⑤

剣豪 大塚参恵八先生

(だいはち)

今から一六三年前の嘉永二年(一八四九年)四月三十日、赤沼村(現在鳩山町)の吉田勘左衛門の次男として生まれ、幼名を荒太郎といった。

慶応二年(一八六六年)、甲源一刀流宗家である五代逸見大四郎長英に師事し、逸見家直伝の目録を受け、慶応三年に月輪村の大塚家に婿入りした。明治十三年に宅地内に剣道場を建て、明治十六年には、自ら左右社の社長

となり近郷の子弟に剣術や学芸を教授した。

明治十七年の冬には秩父に暴徒が起き、自ら門下生十数人を率いて騒動平定に赴いた。その功により官の賞を受け、山岡鉄舟により左右社の額を、榊原健吉より杖と扇を贈られた。自らも諸国遍歴をし、剣術の額を熱海神社(現在静岡県)、函館神社等(現在北海道)へ奉納している。

剣術のみならず政治にも力量を発揮し、宮前村(合併前の村)の初代、三代の村長のほか、郡会議員、県会議員を務め昭和七年(一九三二年)九月四日、八十三歳で逝去した。

(広報二二〇号 昭和六一年二月)



■滑川ふるさと散歩道……⑥

宮嶋勘左衛門之碑

枇木ひぎの考案



宮嶋勘左衛門之碑

かつておむすびや菓子をつつむのに用いたヒギ(地元ではヒゲと呼ぶ)をご存じの方もいるでしょう。そのヒギ作りの創始者が宮嶋勘左衛門である。碑文と地元の言い伝えから彼の功績を追ってみよう。今から一九八年前の文化十一年に月輪村(現大字月輪)の重兵衛の三男として勘左衛門は生まれた。一八歳の時

に仙之助の養子となり、若いころは江戸へ出て幕府の作事さくじ場で働

いていたが、三十歳ごろ郷里に帰り、妻とともに農作業や木挽きをするかたわら、附木つけぎ(松などの木を薄く削って先端に硫黄を付着させた点火用具)の製造に精を出していた。たまに弘化年間(一八四四～一八四八年)に関東一円の竹が枯れて魚・飯・菓子などを包装する竹皮たけかわがなくなった。

勘左衛門は何とかがして竹皮に代わるものを作ってみようと、附木作りに目をつけ、松を附木よりもっと広く薄く削ることを思い立った。苦心の末、ついにヒギを作りだすことに成功した。時に嘉永五年(一八五二年)であった。皮肉なことに、この頃再び竹が繁り出したため、ヒギの普及は芳しくなく、勘左衛門は慶応四年(一八六八年)に五四歳で世を去った。

しかし、その後、ヒギ作りは付近の農家の人達に受け継がれ、明治・大正・昭和を通じて

て、この地方(特に宮前村)を代表する農閑期の副業となった。明治四十年銘の碑文の最後に宮前村村長を務めた大塚麥恵八は次のような讃(徳などを称えたことば)を記した。

卓立一志加鞭 工夫式貫得全

人生儼六十歳 遺業可萬世傳

「人には考えもつかない志を立て 自らを鞭打ち終始一貫した工夫を凝らしそれを果たした。人生ははかなくも過ぎたが 遺業は永遠につたえよ。」というほどの意味か。

(広報一九九号 昭和六〇年三月)



月輪神社獅子舞

滑川ふるさと散歩道……⑦
月輪神社と獅子舞

月輪神社は「月輪の鎮守さま」と呼ばれ、その昔は氷川神社と号し、月輪明神を合祀して往古より地元の人々に崇拜され、永々と守られてきたものである。

祭神は、須佐能男命、月輪兼実、木花佐久

夜毘咩命、味耜高彦

根命、豊受姫神、菅原

道真等である。これだ

け多くの神々を祭神と

したのは、明治四一年

に、月輪地内の諸社を

ここに合祀したこと

によるもので、それ以後



「月輪神社」と神社名が変わったという。

この中に合祀されている月輪兼実とは藤原兼実であり、親・鎌倉派(鎌倉幕府)の大表的な公卿(朝廷に仕えた上級貴族)のことである。伝説では兼実に罪あつて、当地に流され、この地に住んで一心に守り本尊である勢至菩薩を信仰しているうちに罪を許され京都に帰ったといわれる。

しかし、この伝説はあまりに飛躍しすぎているし、江戸時代の「新編武蔵風土記稿」でも土地人の誤りとあり否定的である。実際のところは、月輪兼実の荘園があつたのではないかと言われている。そのためか、年二回奉納されている獅子舞は、この勢至堂の所在する福正寺から出たという。それほど大切にされている勢至堂である。真実はどうであつたか定かではないが、どうあれ地元に残る古代

のロマンである。

さて、後継者に恵まれず、久しく行われなかった月輪神社の獅子舞が昭和五七年の天王さま(七月一日)から見事に復活された。その後、獅子頭や衣装、太鼓等も修復された。現在も、夏と秋、勇壮な獅子舞を披露している。

ふと、空を仰ぐと境内の老大杉が神社拝殿前にそびえ立っている。幾多の風雪に耐え忍び、様々な歴史をかいまみながら、生き続けてきたのであろう。老大杉は神社を守るかのように覆っている。時折聞こえる木々のざわめきは、獅子舞の復活を喜ぶかのようにさせ思える。地元と密接にかかわる古社の重さを一段と引き立たせている。

(広報二二〇号 昭和六一年十二月)

■滑川ふるさと散歩道……⑧

糠ヶ谷戸の道陸神

羽尾の糠ヶ谷戸に道陸神の祠がある。道陸神はサエノカミ(セイノカミ)ともいい、塞神とか道祖神とも書く。もともと道陸神は外部からの疫病や悪霊などを防ぐ神として信仰されてきた。そのため、昔の村境、道の分岐点、峠に多く見られる。ただ、男神と女神が手をつないでいる像を刻んだ道陸神は長野県などに多く、埼玉県には少ない。比企地方では、ここと川島

町吹塚の二か所しかなく、貴重である。銘は「宝曆十庚辰十



道陸神

一月吉日施主廿七人」と彫っており、二五二年前に建てられたものである。羽尾の人々は、草鞋、草履、賽銭などをあげ、特に足が悪い人が拝むのだという。草鞋を編める人はめつきり減り、主に草履が供えられている。道陸神は上野宅の裏にあるので、屋号も道陸神というと呼ぶ。

町内にはこのほか「道祖神」と石に彫り込んだものが、伊古と水房に一基ずつある。

(広報二〇〇号 昭和六〇年四月)

■滑川ふるさと散歩道……⑨

鳴水毛受雄也先生墓碑

毛受先生は、名を重微と呼び、号は鳴水、雄也と称し、文政十三年(一八三〇年)名古屋



で生まれた。幼少の頃から文学を好み、犬山藩校の教授村立斎の門に入り、一二歳の時、尾張藩主徳川斉朝の命により、濃州郡上八幡ぐじょうはちまんの大名 青山幸哉に仕え、藩校潜龍館の助講となった。三六歳で東山道総督岩倉太夫の軍に従い、のち藩校の大助講になった。

廃藩置県で職を辞し、明治一四年、東京から滑川町羽尾の神宮設楽賢木家に移り、寺子屋でもっぱら漢学を教えた。当時の羽尾村は貧村で人々の生計は楽ではなかったらしいが、純朴なこの土地が非常に気に入ったらしい。



毛受先生墓碑

い。授業料も米麦が収穫されたら払うとか、野菜等の物納などですましたらし

く、自叙伝の中でも

「常に優遊其意に任して或は釣糸を前溪に下し、或いは林中に入つて茸きのこを採り、括淡虚無以て貧素に安ずるのみ」

と、日常生活の様子を述懐しているとおり、非常に質素に生きたことがわかる。家人には極めて厳格であったが、門人にはとても懇切丁寧で人情味あふれる教育を行った。

姓の毛受は、全国に三百二十軒位あるが、メンジヨ・メンジヨウ、メンジユ、モージユと呼ばれている。

賤しずヶ嶽がたけの合戦で柴田勝家の臣毛受勝助は、天正十一年（一五八三年）、主君勝家の身代わりとなって、主君の武具をつけて討ち死にしている。主君に対する忠孝義勇が敵大将には

めたたえられたが、この毛受勝助の末裔が毛受先生である。

設楽家の寺小屋から羽尾の山下家に移り、隣に独立した私塾を営んで、多くの子弟に漢学を教えていた。そして、明治二十七年三月十五日、六五歳でこの世を去った。こよなく愛した羽尾の地に先生は葬られたが、門人子弟は先生の遺徳をしのび、墓碑を建立した。

その後、遺族の方が遠い関東の地では供養もできず、できれば転墓を考えたが、地元の人々(子弟)からの懇願で、ずっと当地に眠られている。

昭和五四年に、子弟門人の子孫等で鳴水毛受雄也顕彰会が結成され、毎年先生の遺徳を偲んでいる。先生教育理念は、現在も永々と滑川町に生きているといえよう。

(広報二〇四号 昭和六〇年八月)

滑川ふるさと散歩道……⑩

羽尾七騎(羽尾城跡)

文献に残る町内の古戦場と思われるものに、永享十二年(一四四〇年)の村岡合戦にでる小江山(追山のことにほぼ間違いない 山田地区の地名)と、文明十八年(一四八六年)の山内・扇谷両上杉の合戦に見える羽入の峰(羽尾の峰のこと)、ふく田郷(福田)がある。また、文献に残らないが、この地が中世において合戦場に化していたものと思われる。

このような状況下では、居住する住民は、たえず争乱にとまどい生活していたものと考えられる。戦国期になるとこれが一層激化し、必要に応じて在地の人々も武装することが必要となり、各所で在地武士団を結成していっ



た。今、町内に残る城館跡はそれを裏付ける格好の史料といえる。在地武士団といつても、平素は農業に従事し、いざ戦いとなれば手に刀、槍を持って交戦するといったものである。こうして羽尾七騎は結成されたものと思われる。

羽尾七騎は、羽尾地区に住した後北条支配下の在地武士団で、小田原北条氏の支城、松山城主上田案独斎朝直の家臣山崎若狭介(守)の下に集まった半農半士(羽尾に居住した有力農民である土豪層)の地侍の一団である。中世の武士は、ほとんどこのような形の土豪武士と言われている。その下には家来を持った者もあり、かなりの武士団であつたろうが、禄高などは一切不詳である。

町内にこの羽尾七騎に属したとされる家が現在四戸あり、いずれも関係文書を所蔵している。小沢家では、「羽尾七騎由来書」を所

蔵し、倉林家でもほぼ同様の文書を所蔵している。小林家では多少内容を異にする文書も所蔵する。

その内容を見ると、羽尾七騎は、山崎若狭介を筆頭に小林丹波、増茂因幡、町田帯刀、泉水淡路、倉林形部左衛門、清水甚四郎、七名の名をあげている。小沢出雲は、山崎若狭介家来となっており、七騎には含まれていない。

そして先年、清水甚四郎の子孫は、「須沢」姓に改姓し、やはり七騎の名を連ねた掛軸を所蔵し、「供養おこたることなし」と書き込んでいる。この七騎は、羽尾の地を開発した人たちともいわれ、「羽尾城」は、旗頭山崎若狭介が普請奉行となつて築造した松山城の出城と伝えられる。

(広報二二七号 昭和六一年九月)

町制施行30周年記念事業

滑川 N A M E G A W A ぶるぎと散歩道

発行日 ■ 平成26年11月3日

発行者 ■ 滑川町

所在地 ■ 〒355-8585 埼玉県比企郡滑川町大字福田750-1
TEL.0493-56-2211 FAX.0493-56-2448



埼玉県滑川町